共同研究「“日常茶飯”ー日本人は何を食べてきたかー」

第8回 公開研究会

日本人はなぜアヒルを食べないのか？

ー日本と中国の自然文化誌の比較から

菅　豊氏（東京大学東洋文化研究所教授）

日時：2025年6月20日（金）15:20～16:50

参加自由

開催形式

対面：横浜キャンパス 9号館12室

オンライン：Zoomミーティング

※ 対面にて参加の場合は申込不要

オンライン参加　申込フォーム

申込み後、IDとパスコードが自動返信メールにて送信されます。

主催 神奈川大学日本常民文化研究所

発表要旨

世界的にも有名な鮨や刺身に代表されるように、日本の食文化の中心的食材として魚類が考えられてきました。しかし実際は、野鳥もまた日本の食文化において重要な地位を占めていました。かつて野鳥は食文化のみならず、政治や経済、社会、儀礼などをめぐって、魚やほかの動物たちには見られないような、複雑で高度な文化複合体を日本で形作っていました。

本講演では、現代日本人が不思議なくらいに忘れ去ってしまった日本の野鳥の食文化が、いまでは想像もできないくらいに大きな発展を遂げていた様相を明らかにします。特に多彩な野鳥料理が食べられ、その味が庶民にまで届いた野鳥食文化の爛熟期である17世紀から19世紀の江戸時代の「江戸（東京）」を中心に考察します。さらに、この野鳥食文化と家禽（家畜）食文化を糸口として日本と中国とを比較し、自然依存／自然支配、自給／市場、共同体主義／個人主義といった社会の構成原理の違いを検討します。

『酒飯論』　（16世紀か）

図1　鳥を捌く中世の庖丁人（『酒飯論』）

図2　鳥の羽をむしる中世の庖丁人（『酒飯論』）